



北方民族博物館だより

No.129



上：HR4.10, 下：HR4.11 感染対策用マスク イヌピアック・エスキモー 20.0×13.2cm
 収集地：アラスカ/ウトキアグヴィク（パロー）収集年：2022年

2019年から世界で猛威を振るっている新型コロナウイルス感染症は、北方民族にも大きな影響を与えたと考えられる。アラスカでは部外者の訪問を一時的に制限した先住民コミュニティも多い。歴史的に北方の先住民社会は流行病で甚大な被害を被ってきたため、現地調査を行う研究者も含め慎重な対応が求められている。新型コロナウイルス感染症の流行の最盛期には、各地の北方民族が本資料のようなオリジナルのマスクを製造・販売していたのではないかと推測できる。なお北海道でもアイヌ文様を施したマスクが販売されている。

目次 Contents

- 1 表紙 感染対策用マスク
- 2 講座「北の川の魚たち」
 ／講座「環北太平洋の伝統的な捕鯨と物質文化」
- 3 館長講座「ツンドラのレシピ：トナカイ遊牧民コリヤークの食物資源利用」
 ／ロビー展「Extreme.Relay-伝統を継ぐレース」
- 4 INFORMATION

企画展関連講座

北の川の魚たち

2023.3.12（日）10:00-11:30

講師 市村政樹氏（標津サーモン科学館・館長）

標津サーモン科学館の市村館長を講師に迎え、企画展「川と魚と北方民族」の関連講座を開催しました。企画展では、環北太平洋地域の河川流域で行われる先住民の漁労やそれを取り巻く文化を紹介しました。本講座では、そうした漁労の対象となったチョウザメ類やサケ類の生態、水産業や食物産業とのかかわりについてお話いただきました。

最初に、海水魚と淡水魚の違いについての解説がありました。一生淡水で暮らす魚、川と海を回遊する魚、一時的に淡水に入り込む魚まで、淡水魚にはさまざまな生態の魚が含まれます。企画展で展示したダウリアチョウザメとシロザケも川と海を回遊する魚です。

次にチョウザメ類について紹介していただきました。分類上はサメではなく、魚体がサメに似ていること、鱗が蝶に似ていることから「チョウザメ」という名が付いたとのこと。チョウザメ類には27種が含まれ、かつては北海道の河川にもミカドチョウザメが生息していたそうです。

そしてサケ科魚類については、淡水で産卵し、天然分布域が北半球北部で冷水を好むなどの共通した特徴があること、一方で種によって生態に違いがあることなどを解説していただきました。また、人との関係については、世界のサケ科魚類生産量の4/5が養殖魚で、その2/3がタイセイヨウサケであること、それらが刺身や回転ずしの「サーモン」として食卓に上がっていることなど、身近な話題にも触れていただきました。

最後に、標津町が位置する北海道東部、根室海峡を望む地域の地理的な特徴とそこに生息するサケ科魚類の生態、そうした魚を守る標津サーモン科学館の取り組みについての紹介がありました。

約100枚のスライドを映写する盛りだくさんの内容でしたが、講師のわかりやすい語り口によって、参加者の皆さんは理解を深めていただけたと思います。

(学芸グループ 中田篤)



市村政樹講師

講座

環北太平洋の伝統的な捕鯨と物質文化

2023.3.19（日）10:00-11:30

講師：野口泰弥（当館学芸員）

捕鯨は生存に必要な大量の肉をもたらします。しかし北方民族にとって捕鯨とはただの食料生産なのでしょうか？ エスキモー研究者のM.ランティスは早くも1938年の論文で北方民族に共通する各種の「クジラ信仰」の要素を32個も指摘しています。それは捕鯨に関する各種の特権や名誉、儀礼や呪術、ダンスや歌などの項目を含んでおり、捕鯨が単純な食料生産ではないことを示しています。本講座では北方民族における捕鯨の意義を、社会の階層化とそれに関連する物質文化の観点から考察しました。

北方民族の捕鯨活動を広く確認した上で、今回集中的に取り上げたのはアリユートとユピック・エスキモーです。前者は伝統的に捕鯨を行っていた一方で、後者は基本的に捕鯨を行いませんでした。しかし、両社会は物質文化において様々な共通性が見られます。18世紀のロシアとの接触当時、アリユートは貴族、平民、奴隷といった階層化した社会を有していました。捕鯨者が用いた木製の狩猟帽は最大で奴隷3人分の価値があったとされる一種の「財宝」であり、チーフや貴族だけが所有することができたといえます。

ユピック・エスキモーはアリユートと異なり平等主義的な社会を営んでいたとされます。彼らは捕鯨を行っていませんでしたが、アリユートとよく似た狩猟帽を使用していました。ユピックの世界観ではアザラシは礼儀正しい猟師を自らの意思で訪問し、狩猟されるといいます。狩猟帽はアザラシを獲る際に着用されました。ユピックの神話では狩猟帽を被ることで、アザラシの目には猟師が小さな水鳥に見えることとされています。狩猟帽を被ることは猟師としての腕の良さに加え、アザラシが自ら訪問するような宗教的な高潔さを示していたと考えられます。

ロシアの民族学者のS.イヴァノフは1930年に、アリユートやユピックの帽子を観察し、様々な抽象化が施されているが本質的には両社会の狩猟帽は動物の頭部を形象したマスクになっており、動物に変身することで狩猟を成功させるという共通の信念に基づいていると指摘しました。ユピックの神話はこの見解が正しいことを示しています。

一方でユピックの帽子に高い経済的価値あったかは不明であり、先行研究では狩猟帽は「神聖」なものと思われていたと報告されています。これらのことから本講座では捕鯨が生業活動でありながら必然的に威信獲得活動にもなることと、上層が威信を強く求めるような階層化した社会においては、平等主義的な社会に見られる「聖物」が、財宝化するプロセスが存在するのではないかと結論づけました。

(学芸グループ 野口泰弥)

館長講座

ツンドラのレシピ： トナカイ遊牧民コリヤークの食物資源利用

2023.4.15 (土) 10:00-11:30

講師：呉人 恵 (当館館長)

当館講堂での対面式とオンラインによる併催

本講座では、私がこれまで現地調査をおこなってきたツンドラのトナカイ遊牧民コリヤークの食文化と食物資源観の一端をご紹介します。私はロシアのマガダン州セヴェロ・エヴェンスク地区の各地でコリヤーク語の聞き取り調査をおこなってきました。本講座では、その中でも地区の最北に位置し、今でもロシアの影響が少ない伝統的な食文化を維持しているトナカイ遊牧キャンプのコリヤークの人々に焦点をあてました。

彼らは、トナカイ牧畜を主たる生業としつつも、野生動物、魚、植物などもまんべんなく利用することで、一年を通して飢餓に苦しめられることのない巧みな食のシステムを生み出し、北東シベリアの厳しい自然環境に適応対処してきました。アクセスの悪いこの辺境の地域には外来の食材も入りにくく、小麦粉、茶、砂糖、塩といった基礎食材以外は、文字通り、地消地産を地で行く食生活を送っています。今から115年も前にロシアの民族学者W.ヨヘルソンが著した民族誌『コリヤーク』に描かれた当時の食生活とも大きな違いは見られません。トナカイの骨髄、腱、内臓などを生食したり、トナカイの発酵した血を好んで食したり、食べたい人が食べたい時に食べたい場所で勝手に食べたりと、日本の食文化にどっぷり浸かってきた私たちにはなかなか理解しがたい、ともすれば、「粗野」と表現してしまいたくなるような食生活かもしれません。



ヘラジカの骨髄を食べる女性

しかし、その一方で、トナカイの解体の際に必ずおこなう儀礼や言葉をよく観察してみると、彼らが食物資源、とりわけ「殺し」を経なければ得ることのできない動物資源に対して、実にきめ細やかな配慮をしていることに驚かされます。本講座では、このような配慮に満ちた彼らの食物資源観を、コリヤーク語の表現などを通して紹介しました。

タイトルにある「レシピ」そのもののお話ではありませんでしたが、皆さんが熱心に耳を傾けてくださり、いろいろな質問を寄せてくださったのは、望外の喜びでした。

(館長 呉人 恵)

ロビー展

Extreme.Relay. 一伝統を継ぐレース

2023.4.22 (土) - 5月14日 (日)

本ロビー展では北米の先住民の間で生まれた究極のスポーツのひとつ、Extreme Relay(エクストリーム・リレー)とよばれる騎馬競走を写真と映像で紹介しました。写真は2018年6月にカナダ・アルバータ州ストラスモアでジュリー・ビンセント、ジェイソン・ローレンスが撮影したもので、映像はカナダ各地で撮影されました。

Extreme Relayは、激しく、危険で、スリルに満ちています。競技する人のほとんどは幼い頃から、ときには歩き始める前から馬に乗り、身体に染み込んだ素晴らしい乗馬技術を持っています。男性の競技者は、勇士、戦士、族長として、決まった装束を身に着けて出陣化粧を施し、鞍を付けずに騎乗します。女性の競技者は、多くの場合男性と同じような装束と化粧をしますが、馬に鞍は付ける場合と付けない場合があります。

チームは競技者4人と馬3頭で構成されます。騎手は、1周ずつ乗る馬を替えながらトラックを3周します。チームのうち2人がトラックのスタート地点に立ち、出走を控えた馬の手綱を持って落ち着かせながら、疾走してくる馬と騎手を待ちます。4人目は、その馬を捕まえ、騎手が降りて次の馬に乗るのを手助けします。

このスポーツの根底にある、騎手たちとその家族の深い絆、いくつもの先住民コミュニティに広がり、ときには国境を越える家族の繋がり、そして騎手たちの間で育まれる友情もこの競技の魅力になっています。

写真も映像も、大勢の方が長い時間をかけて観覧されていたのが印象的でした。

本展を開催する機会をつくってくださったカナダ大使館に心から感謝申し上げます。(学芸グループ 笹倉いる美)



会場の様子

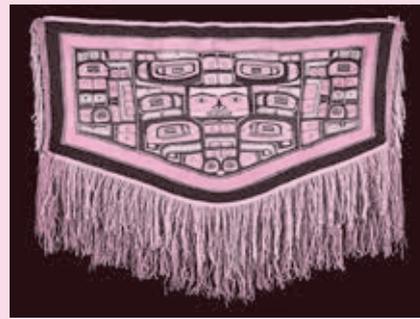
第38回特別展『北方民族の編むと織る』

本展覧会では北方諸民族のもつ多彩な技のなかから、編む技術と織る技術に注目し、編み物と織物が北方民族の文化を特徴づけてきた側面と各社会のなかで果たしてきた役割を紹介します。

会期：令和5年(2023年)7月15日(土)～10月22日(日)
会期中の休館日：10月2日(月)、10日(火)、16日(月)
会場：北海道立北方民族博物館特別展示室
観覧料：特別展 一般450円、65歳以上300円、高大生200円、
常設展・特別展のセット 一般800円、65歳以上300円、高大生320円

関連講座

- ◇講演会 世界のカゴ
日時 7月16日(日) 10:00-11:30
講師 伊藤朝子氏(カゴアミドリ店主)
- ◇講習会 リストウォーマー編み
日時 7月22日(土) 9:30-12:30
講師 結城伸子氏(造形作家)
- ◇講習会 すず糸のプレスレット
日時 7月23日(日) 9:30-12:30
講師 結城伸子氏(造形作家)
- ◇はくぶつかんクラブ ビーズ織りで作るミラーキーホルダー
日時 7月29日(土) 10:00-12:00
講師 平栗美紅(当館解説員)
- ◇はくぶつかんクラブ サミのひもで作る腕時計
日時 8月5日(土) 10:00-12:00
講師 菅原章子(当館解説員)



チルクットローブ／トリンギット

- ◇講習会 白樺樹皮でつくる小物
日時 9月9日(土) 9:30-12:30
講師 山辺朋子氏(白樺細工芸家)
- ◇講習会 アイヌ文化講習会 イラクサの糸づくり
日時 9月10日(日) 10:00-11:30
講師 西田香代子氏(アイヌ文化伝承者)
- ◇はくぶつかんクラブ バスケットづくり
日時 9月16日(土) 10:00-12:00
講師 塩谷舞(当館解説員)
- ◇講座 特別展解説講座
日時 9月17日(日) 10:00-11:30
講師 笹倉いる美(当館学芸主幹)
- ◇はくぶつかんクラブ 白樺の皮で編むカードケース
日時 10月7日(土) 10:00-12:00
講師 平栗美紅(当館解説員)

INFORMATION

行事報告

◆4月19日(水)～5月21日(日)、斜里町立知床博物館・交流記念館ホールにて移動展「『暖かい』だけじゃない!毛皮と北方民族の多彩な関係」を開催しました。本移動展は当館と斜里町立知床博物館、国立アイヌ民族博物館、北極域研究加速プロジェクト(ArCS II)沿岸環境課題の共催で開催しました。

また5月6日(土)、同会場にて講座「『暖かい』だけじゃない!毛皮と北方民族の多彩な関係 ギャラリートーク」(講師:日下稜 北海道大学低温科学研究所学術研究員、是澤櫻子 国立アイヌ民族博物館アソシエイトフェロー、中田篤 当館主任学芸員)を開催しました。



解説する中田主任学芸員

◆4月30日(日)上映会「北方民族博物館シアター春」(担当:笹倉いる美学芸主幹)で「ミスタッシニのクリーの獵師」他4本を上映しました。
◆5月3日(水)～5日(金)GWイベントとして「オリジナルマグネットキット」を各日先着100名にプレゼントしました。



オリジナルマグネットキット

◆5月27日(土)、はくぶつかんクラブ「フェルトで作るゲル型小物入れ」(講師:石原生久代解説員)を開催しました。



上手にできたね!

◆6月10日(土)はくぶつかんクラブ「トートメポールのペンスタンド」(講師:塩谷舞解説員)を開催しました。



完成したぞ!

北方民族博物館だより No.129

令和5年(2023年)6月21日発行
編集・発行 北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org
http://hoppohm.org
指定管理者
一般財団法人北方文化振興協会